

2011

感情の共有～怪談えほん～

A Ghost Story Picture Book

AD13 佐藤 香琳
指導教員 西野 隆司

1. 研究目的

絵本は、他の読み物に比べ、親や兄弟、第三者と読むことが多い。そこで、他人と感情を共有させられるような絵本を作り、より人と人との距離を縮めることを目的とする。

2. 調査と分析

共有させる感情として「恐怖」を題材とする。

恐怖は多くの人に共通する感覚であり、人はその実態や力が計り知れないもの、未知のものに恐怖する。本研究ではその「未知の恐怖」を大きなテーマとして扱う。

ではなぜ、「喜び」や「悲しみ」といった感情ではなく、「恐怖」なのか。恐怖が引き起こす効果として“吊り橋効果”というものがある。“吊り橋効果”とは、カナダの心理学者、ダットンとアロンによって 1974 年に発表された「生理・認知説の吊り橋実験」によって実証されたとする学説で、恐怖感情を恋愛感情と勘違いしてしまう、というものである。この“吊り橋効果”を起こすことにより、人と人との距離を縮めることを狙った。

3. コンセプトの立案

「未知の恐怖による感情の共有」

日常生活の中にある「未知の恐怖」。例えば、頭を洗っていて後ろが気になる、ちょっとだけ開いているドアの隙間が気になる、など。いわゆる、恐怖あるあるを絵本にした。

4. デザイン展開

絵本は手描きで、主人公の不安定な気持ちを出すために定規は使わず、線の揺らぎを活かした。

主人公は小学生の男の子。恐怖感情が伝わりやすいように、目を大きくした。



主人公

5. 完成図

- ・タイトル:『ぼくの いえには』
- ・内容量:32 ページ
- ・サイズ:見開き A3



見開きページ例

6. 結論

ターゲットである親子に完成した絵本を読んでもらい、検証を行った。

35才のお父さんと5才の親子で検証を行った結果、絵本を読んでいる時の子どもとの身体的距離感はいつもとあまり変化はなかったものの、恐怖感情を少し共有できたとの感想を得られた。

この絵本で子どもに恐怖という感情を与えることが出来たか、というところでは、子どもから絵本が怖すぎた、との意見をもらい、その後も絵本のことを気にしている様子が見られたので、達成できたといえる。また、子どもからは各ページにいる『なにか』を探すのが楽しかった、という意外な意見ももらった。

もう少し“共感”についての調査をして、もっと共感できるような工夫を施すべきだった。

文献

- [1] メリン リン ヘンドリックス、“感情脳 恐怖の条件付けから学んだこと、アメリカ精神医療局”
<http://mui-therapy.org/newfinding/emotionbrain.htm>
- [2] 国立精神・神経センター神経研究所微細構造研究部 湯浅 茂樹、“恐怖する脳、感動する脳”
<http://www.brain-mind.jp/newsletter/04/story.html>
- [3] 国民生活白書、第二節“家族のつながりの変化による影響”
http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/01_honpen/html/07sh010201.html